

子どもの笑顔が輝き
勢いのある学校

No. 2 (H30. 4. 16発行) 文責 校長 福田雅也

清流

本年度から、郡内のすべての小中学校において、2年前に熊本地震の本震があった4月16日を「かみましき『命と防災』の日」とすることになりました。本校でも何らかの取組をするべきだと考え、今回の学校日より、2年前の5月6日、前任校である高森東小学校で、学校再開後に発行した学校日より、原文のまま掲載させていただきます。

経験して分かる思い

熊本地震の本震があったのが4月16日未明、あの日から3週間が過ぎました。目の前の現実、目の前の風景が夢であってほしいと願う日々でした。しかし、そんな願いを打ち砕くように余震が続き、現実を突きつけてくる日々でもありました。

私が地震後に感じていることの一つに、「人の気持ちになって考えること」がいかに難しいことか、ということがあります。

東日本大震災の時に、被災した方々の姿や、被災地の人々に向かって応援や励ましの言葉を送ったり、行動をおこしたりする方々の姿を見ました。その時私は、それらにしっかりと共感しているつもりだったのです。しかし、その時感じた感情と今回の感情がずいぶん違っていったのです。

最近の自分が涙もろくなってきていることは自分でも自覚していました。しかし、そうだとすると、今回の経験の中で、被災に悲しみ苦しみ、そしてそんな中でも光を見出そうとしている方々の姿や、私たち熊本県民に応援や励ましの言葉を送ってくださる方々の姿に、東日本大震災の時以上に目頭が熱くなったり、胸がいっぱいになったりする感情が何度も何度もこみ上げてきたのです。

倒壊した阿蘇神社の楼門を前に、呆然と涙する方の姿を見たときがそうでした。いまだに行方不明の大学生のご両親の姿を見たときもそうでした。(お母様は阿蘇市の学校関係にお勤めでした)閉院せざるをえないことを話されている立野病院の責任者の方と、それを聞く職員の方々の姿を見たときもそうでした。避難所となっている南阿蘇中学校でボランティア募集が始まったとき、率先してボランティアに参加している南阿蘇中の生徒の姿を見たときもそうでした。

また、高森町出身のNHKアナウンサー武田真一さんが、今回の地震を特集したNHKスペシャル(本震直後の4/16夜放送)に出演し、「熊本県は私のふるさとです。家族や親戚、たくさんの友人がいます。そのふるさとで多くの方が犠牲になり、そして多くの方々が絶え間なく続く地震におびえながら、また今夜も明かりのない夜を迎えることを思いますと、胸が締め付けられます。」と心情を吐露し、番組の最後には、「被災地のみなさん、そして私と同じように、ふるさとの人たちを思っている全国のみなさん、不安だと思えますけれども、力を合わせて、この夜を乗り切りましょう。この災害を乗り越えましょう。」と呼びかけられた時もそうでした。

どの場面に登場する方々も、身近な方々ばかりです。自分が生活している範囲で一緒に暮らしていた方々、関係のある方々ばかりなのです。きっとそのことが、私の感情に違いを生ませているのだろうと思います。人事ではなく、より当事者に近い立場でその人の気持ちを考えることができているのだろうと思います。今回の経験の中では「人の気持ちになって考えること」ができているのかもしれない。

私たち教師は、子どもたちに「人の気持ちになって考えなさい」とよく言っています。しかし、それはできそうなことでありながら、本当はとても難しいことなのだと思ってきました。まさに経験して初めて分かる思いがあるのだと思います。

また、子どもたちの経験という点に目を転じると、今回子どもたちは、日常とは違う様々な経験の中で様々なことを感じているのではないかと思います。それらは、地震への「恐怖」をはじめ、ほとんどがマイナスの経験なのだろうと思います。しかし、そのマイナスの経験を、例えば「人の気持ちになって考えることができた」というように、プラスの感情や力に変えることは、私たち大人の大きな責務だろうとも感じています。